

子どもスペシャリストに期待される子育て支援の充実 —「障がい」と「地域」をキーワードとした人材育成につなげて—

特別支援教育研究室 瀬戸口 裕二
都城市役所総合政策部 原口 奈々

1. 現代的課題としての「子育て支援」

現代において、子どもや子育てに関わる環境は著しい変化にさらされ、子どもを支える専門家としての子どもスペシャリスト（本稿では、南九州大学人間発達学部で養成する障がい児や様々な困難に直面する保護者支援にも対応できる幅広い専門性を備えた保育士、幼稚園教諭、小学校教諭を中核として捉えている）に求められる専門性も、幅広い課題への対応力やより高度で効果的な課題解決力など多様化・高次化しているといえる。中でも、1994年の「今後の子育て支援のための施策の基本的方向について（エンゼルプラン）」の提唱以来、「子育て支援」という言葉が広く社会一般で用いられるようになり（横山・川崎，2021）、子どもを直接支援するだけでなく「子育て支援」にかかる専門性が現場の支援者にとって大きな課題となってきた。

エンゼルプランでは、保育の充実（低年齢保育、延長保育等）などによる「仕事と子育ての両立支援」を果たす対策のほか、「家庭における子育て支援（地域の子育て支援センターや保育所などに併設される育児相談など）」等の保育関連事業の施策が特徴として展開されてきた。

2. 幼児教育の課題

幼児教育においては、「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について（答申）」（文部科学省2004）で、子どもの育ちの現状を以下のように整理している。

・近年の幼児の育ちについては、基本的な生活習慣や態度が身に付いていない、他者とのかわりが苦手である、自制心や耐性、規範意識が十分に育っていない、運動能力が低下しているなどの課題が指摘されている。

・小学校1年生などの教室において、学習に集中できない、教員の話が聞けずに授業が成立しな

いなど学級がうまく機能しない状況が見られる。

・近年の子どもたちは、多くの情報に囲まれた環境にいるため、世の中についての知識は増えているものの、その知識は断片的で受け身的なものが多く、学びに対する意欲や関心が低いとの指摘がある。

また、その要因を少子化・核家族化などの進展、地域社会の教育力低下、家庭の教育力低下、教員等の資質や新たな課題に対応した人材育成にあるとし、「幼稚園等施設の教育機能の強化・拡大」「家庭や地域社会の教育力の再生・向上」「幼児教育を支える基盤等の強化」という3点の課題を挙げている。その課題解決の方策の中で、幼児教育全体を地域で支えていくシステムの必要性が明示され、幼児教育を支援する拠点機能（センター機能）の整備が提唱されている。

3. 学童期の教育の課題と発達障害

一方、文部科学省は「学級がうまく機能しない状況」と称して1999年に国立教育研究所（現在の国立教育政策研究所）内の学級経営研究会に調査を委嘱した。当時マスコミ等で話題が沸騰していた、いわゆる「学級崩壊」についての調査であった。学級経営研究会（2000）は学級崩壊の全国の事例を分析した結果、学級崩壊を「子どもたちが教室内で勝手な行動をして教師の指導に従わず、授業が成立しないなど、集団教育という学校の機能が成立しない学級の状態が一定期間継続し、学級担任による通常的手法では問題解決が出来ない状態」と定義した（道城、2020）。ここには、学級崩壊をミクロ要因（教育実践的な要因）とマクロ要因（社会構造的な要因）という教育社会学的な要因分析（須藤、2015）もあったが、同時代的にクローズアップされてきた発達障害（以下、法律用語として「害」を用いる）の子どもたちの存在もあった。現在、通常学級に特別な教育的ニー

ズのある児童生徒が多く在籍していることが文部科学省の実態調査から明らかとなっている（文部科学省、2012）。実態調査では、通常学級において行動面あるいは学習面において支援を必要とする児童生徒が6.5%いることが明らかとなった。2007年には特別支援教育が始まり、通常学級に在籍する限局性学習障害（LD）、注意欠如多動性障害（AD/HD）、自閉症スペクトラム症などの発達障害を含む、特別な教育的ニーズがある子ども達への支援が行われるようになった（道城、2020）。

特別支援教育では、各学校に「特別支援教育コーディネーター」の指名が義務づけられた。子どもの教育的支援や子育て支援のみならず、授業支援や学級経営の支援をも含めて展開することが求められている。さらに、地域の特別支援学校は地域のセンターとして（センター的機能）、地域の学校や各学校の特別支援コーディネーターを支えていくことが求められるようになった。

4. インクルーシブ教育の展開

2010年に、文部科学省において「特別支援教育の在り方に関する特別委員会」が開かれ、インクルーシブ教育理念の方向性が示された。さらに、2012年には、文部科学省（中央教育審議会）において「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進」が提唱された。そのなかでは、“共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築”、“就学相談・就学先決定の在り方の検討”、“障害のある子どもが十分に教育を受けられるための合理的配慮及びその基礎となる環境整備”、“多様な学びの場の整備と学校間連携等の推進”、“特別支援教育を充実させるための教職員の専門性向上”などが指摘されている。障害のある児童生徒に対する障害福祉サービスおよび障害児支援もインクルーシブ教育を助長したと考えられる。

2004年には「発達障害者支援法」が立法化、2005年に施行され、「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（障害者差別解消法）」が2016年に施行されるに至って、発達障害のみならず、障害のある子どもや医療的ケアを要する子ども

もと地域の子どもたちが保育所・幼稚園・学校において共に育つ環境が急速に整ってきた（高橋・松崎、2014）。障害のある幼児・児童が教育の場を異にすることなく、生活する地域を根拠とする同一の場で学ぶ方向性が際立って明らかとなってきた。

5. 共通の課題としてのセンター及び専門性

ここで注目したいのが、保育・教育で共通にセンター機能が求められていることである。専門機関であるこれらの機関が、直面する課題にあたって専門的な支援を必要としているということである。しかし、就学前の子ども・子育て支援と学齢期の教育における支援の連続性や協働性を一貫して維持させるシステムが十分に整備されているとは言いがたい。

子ども支援と子育て支援に関わる様々な施設や資源がそれぞれの特性や役割に応じて、重複するサービスのあり方や行政的な枠組みを超えた機能の再編を行い、一貫したサービス提供を中核としたセンターシステムとそれを支えうる人材の育成が強く求められる。行政の枠組みごとに進展してきた個別のシステムを当事者視線や現場の専門家をも支える統合的なシステムにするためには、「共通化」と「共有化」、「システムを担う専門家養成」がキーワードとなる。

また、従来の制度下で養成されてきた、子どもスペシャリストが、新たな課題に即したカリキュラムや学習内容などを基盤として養成されてきたわけでもない。もしくは新しい障害概念である発達障害の理解や適切な評価及び対応について養成段階から十分に学んできたわけでもない（保育士養成課程では従来からの「障害児保育」2単位。2020年から幼稚園・小学校等の教員免許取得のために「特別支援教育」が2単位必修化された）。ましてや同僚教師を支えるコンサルテーションや組織内で求められるコーディネーションに関わる学びは十分ではない。

6. 都城地域障害児支援専門性向上研修事業の企画

現在、都城地域（定住自立圏：宮崎県都城市、同三股町、鹿児島県曾於市、同志布志市）では、保育園、幼稚園、児童発達支援事業所、相談支援事業所、児童発達支援センター、小学校、放課後等デイサービス事業所、一部障がいのある子どもの受け入れをしている放課後児童クラブなどの多様な場で障がいのある子どもがサービスの提供を受けている。その事業主体も公立、社会福祉法人、学校法人、NPO法人、株式会社、有限会社など

多様である。他の地域同様に、都城地域においても事業内容や提供されるサービスの質や水準、職員等の専門性、その向上のための取り組み、行政や事業所を超えたシステム、相互連携やその基盤となるネットワークの構築など課題は散在している。

特に、ネットワークの構築と専門性の向上が急務であり、2021年度より都城市、曾於市、南九州大学との間で「都城地域障害児支援専門性向上研修事業」に着手した。

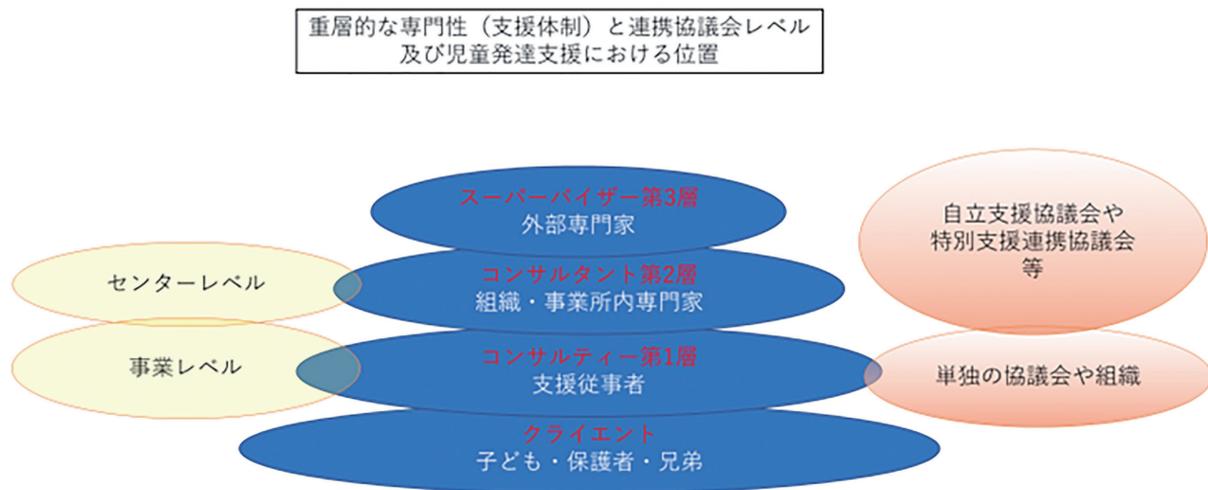


図. 1

研修の場を同じくした関係者間のネットワーク構築が可能となることやそのネットワークを活用した実務的且つ実効性の高いケースカンファレンスの実施が特徴となるものであった（研修内容参照）。

また、本事業で養成される人材と機能は、地域の保育所等巡回支援や学校の特別支援教育コーディネーターであり、すでに保護者、現場の職員、対応に苦慮している事例などの支援に直面している人材である。地域や組織内で階層的な専門家が機能する重層システム（図. 1）でいう第2層の専門家である。当面は大学の持つ専門的な機能（スーパーバイザー）でコンサルタントは支えられるが、このコンサルタントによって支えられた人材が次のコンサルタントの役割を果たす人材

となることが期待される。本研修事業では、そのネットワークの中核的人材養成を目したことで、ネットワーク内で循環的に新たな人材を継続的に育てる自律的な人材養成モデルを見通すことができる特徴を有する事業である。

さらに、本研修事業の成果には、本学学生の実習等の学びの場でもある都城地域の専門性向上への期待があり、そのことが学生の学習環境を地域と共に向上させることにつながるという意義をも期待することができる。

7. 事業成果

(1) 研修内容

・講義

1 単位時間を90分として13時間実施（感染症

によるオンライン含む) (当初予定15回、感染症拡大による中止2回)

・演習 (ケースカンファレンス)

12月より毎週開催を基本とし、隣接地域で構成されたグループごと (全6グループ: 学校グループは特別支援教育コーディネーターの業務の一環となるため、学校グループとして地域によらず構成) の実施9回予定。実施11回。

(2) 対象者

・保育士、認定こども園職員、子育て支援員、放課後等児童支援員、児童発達支援員、幼稚園教諭、支援員、小学校教諭、特別支援学校教諭 (特別支援教育コーディネーター) 等を募集対象とした。

・参加者数 計25名 (都城市に事業所等がある者 23名、曾於市立小学校 2名)
年度内辞退者 2名

・所属内訳

民間 (株式会社、NPO法人等) 児童支援施設等職員 11名 (会社都合による辞退 2名)

民間 (社会福祉法人、学校法人) 職員 7名

社会福祉協議会、公立保育園 2名

小学校4名、中学校1名

・職種内訳

教諭 (うち1名は幼稚園)

6名

保育士2名

療育、相談支援事業所等職員

16名

社協子育て応援課1名

※中には、事業所内 (管理、指導的立場として) もしくは事業所外の相談支援 (保育所等巡回支援など) に当たるものが含まれる。

本年度の事業は、新型コロナウイルス感染症の蔓延等に伴う様々な制限があり、当初予定通りには実施できなかった。また、グループ内でのケースカンファレンスも各グループ1~3回程度しか実施できなかったが概ねの研修は終了し、研修参加者には研修修了証を手渡すことができた。

大学の地域貢献活動として今年度の展開があったが、今後も安定して継続していくことや効果的なシステム構築のためには、以下の様ないくつかの課題も存在する。

- ① コンサルテーションが実施できる水準の専門性の担保
- ② スーパーバイザーとして研修を継続する際の制度的位置づけの明確化
- ③ 研修成果が活かされるシステム及び今後の研修人材の選定方針設定
- ④ 対象地域の確定
- ⑤ システムの共同構築及びシステム共有の調整

都城市総合政策課が実施したアンケート結果 (資料) を検討した結果、2022年度も継続してカンファレンスを中心とした研修を継続することとなっている。

引用文献

須藤 康介 (2015) 「学級崩壊の社会学: ミクロ要因とマクロ要因の実証的研究」、明星大学教育学部紀要、5、p.47-59.

高橋 純一・松崎 博文 (2014) 「障害児教育におけるインクルーシブ教育への変遷と課題」、人間発達文化学類論集、19、p.13-26.

道城 裕貴 (2020) 「「学級崩壊」及び「学級の荒れ」に関する国内研究の展望」神戸学院大学心理学研究、2、2、p.95-102.

横山 文樹・川崎 理香 (2021) 「地域子育て支援の役割と課題-児童館における子育て支援の実践から-」、東京未来大学研究紀要、15、p.171-179.

都城地域障害児支援専門性向上研修事業日程

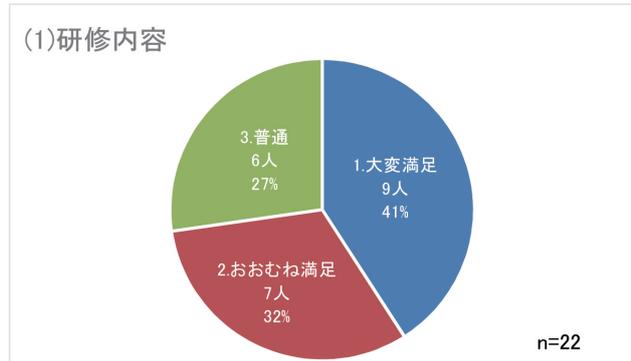
○実施形態

- ・月1～2回 15:00～16:30(日程別途)
- 8月6日(金)のみ、13:00～16:10
- 8月17日(火)10:20～11:50、13:00～14:30、14:40～16:10
- 8月18日(水)13:00～16:10

領域	科目名	講義担当者	開催日
概論	子どもの障害や家族、学校園への対応と連携	瀬戸口	5.21
アセスメント	アセスメント総論	瀬戸口	6.11
	心理検査 (WISC- III、WISC- IV)	本田	6.25、7.9
	心理検査 (KABC- II、DN-CAS)	瀬戸口	7.23、7.30
	行動のアセスメント	瀬戸口	8.17
	アセスメントの解釈と支援計画	瀬戸口	8.6×2
支援の適用	発達障害の理解と支援	瀬戸口	8.17
	知的障害、自閉症の理解と支援	本田	8.17
	肢体不自由や医療的ケア児の理解と支援	野村	8.5
	基礎的学習の支援	瀬戸口	8.18
	行動面の支援	瀬戸口	8.18
演習・実習	個別支援計画の作成	瀬戸口、野村、本田	9.3
	ケースカンファレンス	瀬戸口、野村、本田	
	職場におけるコンサルテーション	瀬戸口、野村、本田	
研修報告	研修報告書	瀬戸口、野村、本田	

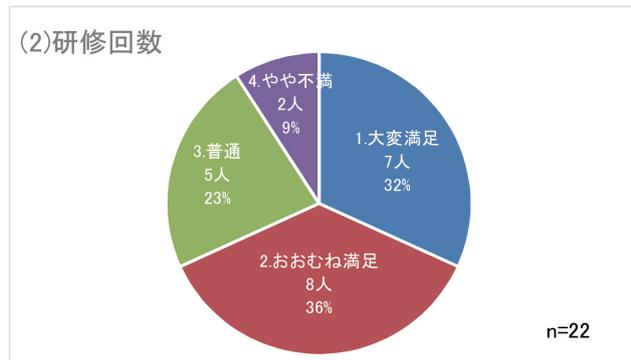
演習、実習に伴う定例研修日 9/10、10/8、11/12、12/10、1/21、2/21
 担当者は、瀬戸口、野村、本田

R3都城地域障害児支援専門性向上研修 受講者アンケート【回答率23人中22人(95.7%)】



研修内容の満足度 73%

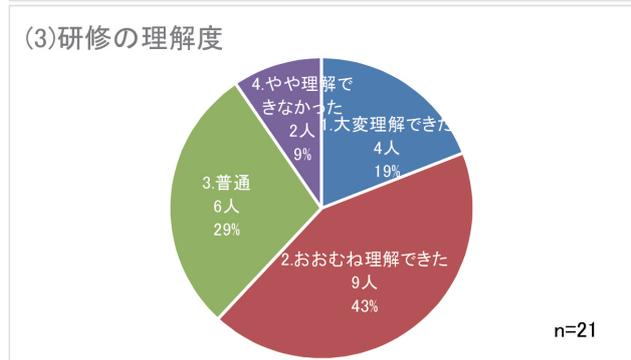
【コメント】



研修回数の満足度 68%

【コメント】 **コロナによる休講に対する意見が多かった**

- ・コロナ休講分は大変残念でした。
- ・職場的には大変かもしれませんが、もう少し短時間で講義を行ってグループワークの時間がもう少し取れたら良かった。コロナ等で参加できないことが多かったので。
- ・大学の講師の方の講義は、回数を増やしても良いと思いますが、夏に集中していたので、1年を通して平均的に月の回数を同じ位にしてほしかったです。
- ・コロナで実施できないのが残念でした
- ・コロナのために、受講回数が減ったため。多くの話を聞いたり、カンファレンスを行ったりしたかった。

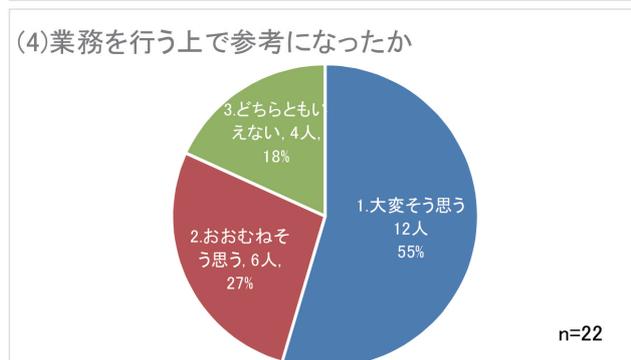


研修の理解度 62%

心理検査・WISCに対する意見が多かった

【コメント】

- ・WISCの計算の仕方など、理解が難しかった。
- ・自分の職場の利用者がほぼ講義で話を聞いた心理検査に該当する方がいなかった
- ・WISCはやはり難しかったです
- ・心理検査については、理解が難しかったです。
- ・講義の内容が深いところもあり、学べて参考になった。理解をしたところもあるが、まだ学びたいと思い、普通を選択しました



82%が業務の参考になったと回答

【コメント】

- ・心理検査の内容やグラフの見方等は今後にも参考になるので、とても良い勉強をさせていただけたと思っています。

(5) 学んだことを取り入れたことにより勤務先での変化があった場合は、どのような変化・効果があったか。
(自由記述)

・カンファレンスしていただいた児童がとても落ち着きました。ありがとうございました。

・特別支援教育コーディネーターの担当をしています。研修では、専門的な知識を増やすことができ、また、特性のある子どもとの関わり方についてもアドバイスをいただきました。以前よりも、自信がもて、計画的に校内のケース会議を開き、職員会で配慮を要する生徒に対する対応の仕方など提案することができました。先生方も理解や協力をしてくださっています。

・相談支援業務において発達検査(知能検査)の話が出ることもあり、IQ70～80の児童さんの保護者に対して知的障がいかもしれないが療育を受けない場合と知的障がいではないかもしれないが療育を受けた場合では療育を受けておいた方が良いのではという話ができるようになった。療育を受けるかどうか迷っている保護者の背中を押すことができたのではないかと思います。

・実際に、当事業所で困り感ある子どもに対して、講義内容にありました三項関係を取り入れた支援を実践する機会がありました。そのお子さんは、この方法だけではなく、同時期に家庭と当事業所で新しく環境を変えた事も重なり、今は落ち着いて生活できるようになりました。今後も研修で学んだことを実践、検証し、結果を職員と共に学びあいながら、困り感ある子どもや保護者のサポートをしていきたいと思っています。

・勉強をさせて頂いたことを、自分自身に落とし込むのに時間がかかっていて、まだ実践できていないことが多いです。二項関係から三項関係に導く指導については、頭に置きながら支援を行っているところです。先日、瀬戸口先生に来て頂き、ケースカンファレンスをして頂いた子どもの支援方法を実践してみました。まだ回数が少なく、子どもにはまだ変化は見られませんが、私のクラスの担任に実践を見てもらい、納得してもらえました。

・職員に子どもの見方を伝えて、実行してもらっている途中ですが、子ども達の反応が変わってきたり、職員の関わり方も変化してきています。

・この研修で学んだことを社内研修で周知徹底しました。そのことで支援者の子どもへの関わり方の価値観がまとってきました。研修を受ける前は、ネガティブな子どもの気持ちに寄り添い過ぎる支援者と、ネガティブな感情には寄り添い過ぎず集団活動に参加を促す支援者との間で関わり方の違いがありました。この研修の行動問題の講義後は、支援者間の行動問題に対する子どもへの関わりに統一感が出てきて子どもも集団活動時に落ち着いてきたと思われます。

・事業所内での支援計画更新や、カンファレンスにおいて、進行や支援を考えるうえで参考になりました。他の職員へ説得力をもって説明できるきっかけになりました。

・グループワークの時に、主訴や願い・要因などを細かくしていく事で、また、子どもの水準で考えていくことで、声掛けや支援の仕方等変えることができたと思う。気になっている利用者が以前は私のメガネを取っていたのですが、あえてメガネを貸してあげることで、本人がかけて鏡で自分の顔を見て、ニコニコしていて、ちゃんと気が済めば、返しに来てくれるようになりました。その他にも、職員とのスキップを取り入れてみたりすることで、自分のやりたいことなど行動で示してくれることが見られるようになり、言葉はなかなか伝わりにくくても別のコミュニケーション方法をお互いに見つけられているようになってきています。

・自発から訪問へ転職したため、変化は不明となりますが、今後取り入れて変化を見つけれたらと思います。

・職場で取り入れたということはまだありませんが、自分の考え方には変化がありました。ケースカンファレンスでは、難しく考えるのではなく1つ1つその子のことを捉えていくこと、確認していくことが、その後の変化に繋がるのではないかと考えました。

・申し送りをしたことを他の職員に伝えると、他の職員が実践していた。

・学んだことを取り入れて、すぐに変化・効果は見られていないが、援助をする時に研修で学んだことを思いながら取り組んでいます。

・保育の現場で、子どもの困り感をいろいろな方向から職員と話せるようになった。決めつけが若干あったようなので、子どもに寄り添うことが少しずつ出来てきたように感じた。

・演習で当園の事例をださせていただいたことで、職員にカンファレンスの結果を伝えたり、私が、カンファレンスの仕方を学んだことで、園内のカンファレンスで具体的な視点を通して、どのようにアプローチしていくと良いのかを話して、援助方法を考えた。

・WISCⅢの見方や子どもたちの見方を学んだことで、ケース会議に活かすことができ、アプローチの方法を考えることができた。

・研修で学んだことやいただいた助言を授業の中で、取り入れることができた。実践は失敗したこともあったが、どのように対応すればよいかを把握できた。他のクラスの子供の学びにおいて、「認知」について聞いていた講義の内容を伝えることで、その子の特性を理解してもらえた。

(6)さらに充実させていきたい資質

順位	障がい理解の知識力	支援者としての実践力	実態把握のためのカンファレンス力	連携構築のためのネットワーク力	支援方法を導く力	伝える力(コンサルテーション)	その他(聴く力)
1	6	4	3	1	2	2	1
2	2	2	6	4	3	2	0
3	3	6	3	2	5	0	0
4	0	2	5	1	5	5	0
5	2	3	0	4	3	5	0
6	5	2	1	5	1	3	0
7	0	0	1	0	0	0	0

(7)令和4年度に、令和3年度受講生を対象に、ケースカンファレンスを中心とした研修を実施する場合、受講を継続するか

意向	人数
1 継続する	14人
2 分からない	6人
3 継続しない	2人

【継続する】

- ・個人では参加したいと思います。また、学校長に確認し、ご連絡します。
- ・コロナの感染状況で、他の職場の方たちとのケース会等が難しい時があるため、参加できないことがあるかもしれません。
- ・後任に引き継ぎ、継続したい

【分からない】

- ・受講においては大変興味がありますが、実務と時間の折り合いをつける必要があるため、現状判断がつきません
- ・職場も私自身も継続したいのですが、午前中もしくは、17時以降の研修であれば参加可能です。
- ・コロナ感染状況や研修に参加する時間を作れるかどうか分からないため。個人的には是非参加させていただきたいです。
- ・会社の人員体制が不明なため。
- ・異動も考えられるので4月以降は配属部署の上司と相談してからになりそうです。
- ・継続していきたいが、転勤かもしれないから。

【継続しない】

- ・通級指導のため、ケースになる児童を選定しづらい。特に、他校進級の場合、保護者、在籍担任、在籍校との連絡調整が難しいため。
- ・仕事の調整が難しいため

(8)本研修に関する事務局への御意見・ご要望など

・とても良い機会をいただき、ありがとうございました。こういう会をたくさんの先生方に受けていただきたいと思います。

・WISCⅢの扱い方・読み取り方の講義があいにく出席できませんでした。補講があると聞いたので連絡しても返事ははっきりせず。あと、WISC4の取扱いを聞きたかった。現在、WISCⅢは使用しないのでは。

・この度は研修に参加させていただきありがとうございました。大学の教授の講義を受ける機会が貴重な経験となりました。まだ勉強不足な点もありますが、以前よりも特別支援教育についての知識やスキルを身に付けることができました。学校では、特性のある生徒が増えており、個別指導の必要性を感じています。しかし、特性は多種多様であり、職員数にも限りがあるので、行いたい支援があってもできない場合もあります。中学校の場合は、不登校にもつながりやすいです。今後の研修では、より実践的な内容(ケースカンファレンス、他校が行っている支援の工夫など)について知りたいです。

・初の試みとして大変ご苦労されたことと思います。それでも受講者として特に不自由することなく研修に望むことができ、行政担当者の方、南九州大学関係者の方に対し感謝申し上げます。ありがとうございました。

(8) 本研修に関する事務局への御意見・ご要望など(続き)

・カンファレンスの研修をぜひお願いしたいと思っておりますが、対象児童の保護者への了解を得る際に、講師の先生は大丈夫なのですが、**当事業所以外の講習生が入られることには了承を得にくい状況があります。**できれば、**関係者のみでのカンファレンスをお願いしたいです。**

・今年度、研修させて頂きありがとうございました。とても勉強になりました。特にwisc-Ⅲ等の検査については、無知だったので、勉強させてもらったことを活かして、検査結果を検証していきたい思います。来年度、ケースカンファレンスを中心とした研修を是非受講させて頂きたいと思っておりますが、**時間帯を午後3時以降に設定していただくと、とてもありがたいです。**

・コロナ感染で研修がなくなったりしましたが、忙しい中、様々な方法で続けてくださり、助かりました。ありがとうございました。

・最近、発達障害ではなく、情緒面につまずきを持っているがために発達障害とよく似た症状が見られる子どもの放デイ利用が多いと感じます。その理由は、療育をするにあたり困り感は見られないのですがその子どもと親の関わり(家庭内)の中でみに発達障害でよくいわれる症状がでるらしいからです。保護者の方は「発達障害だからこんな行動をする」という思いが強すぎて、事業所での姿を伝えると「この子のことを全然分かってくれない先生」と思われることもあります。保護者との信頼関係を築けていないと言われればその通りだと思います。しかし、発達障害のことを学べば学ぶほど「発達障害」ではないと思われ、病院での診断もない子どもが増えている気がします。今後、このような研修があれば、**愛着障害についての研修、そして保護者の子育てにどのように関わっていくことがいいのか等を学びたいです。**

・1年間ご教授下さりありがとうございました。

・放デイのため、今回の時間帯はとても厳しかったです。もう少し時間帯(午前中もしくは17時以降)が違ったら、参加できたのではないかと思います。また、コロナのこともあり、グループワークにあまり参加できなかったのが心残りです。もう少し、グループの方の事例等を聞きたかったなと思っております。一度、**講義に参加できなかった日の講義が再度視聴できるシステム**があると再度確認もできるのであればいいなと思っております。

・1年間ありがとうございました。

・一つ一つの講義ももう少し時間をかけて受講できたらと思います。また、ケースカンファレンスは、とても勉強になるのですが、コロナの広がりてなかなか日程があいませんでした。(園で陽性者が出たり、家族が濃厚接触者になったりなど)

・コロナ感染状況の不安定な中、研修の調整等をしていただきありがとうございました。日頃の業務で、地域の子どもたちの支援をさせていただく中で、もっと支援者同士の横のつながりが必要だと思っております。今回の研修事業では**他事業所とのつながりを持つことができたので大きな収穫だ**と思っております。最近放課後等デイサービスなどの福祉施設が乱立しているような印象を受けます。**今後は連携強化とともに、支援の質の向上も必要な課題になるのかなと思っておりますので、質の向上を目的とした事業も組んでいただくと嬉しく思います。**よろしくお願い致します。

・**幼稚園や小学校の先生方と同じ研修が受けられたことで、支援の統一に繋がると感じた。**もっと受講する人数が多いとありがたいです。

・今回の研修で、たくさんのことを学ばせていただきましたが、**地域での中核的な役割を担う人材になるためには、もっと沢山の子どものケースカンファレンスを講師の方と共に研修して学ばなければ難しい**と思います。

・職種の違う先生達との繋がりができ、話を聞くことができました。今後も先生達とケースカンファレンスが出来れば、充実した支援が出来そうです。機会を設けてくださり、ありがとうございました。

・基本を知るうえで、改めて必要な内容を学んだ研修であったと思う。それぞれの置かれている職務を知ることに繋がったが、**現場の実態を立場を超えて共有する尺度を持つてほしいところもあった。**

・内容の濃い研修をありがとうございました。**いままでの支援の在り方や考え方を見直すいいきっかけになりました。**様々なところの方と話す機会もあり、研修の時に分からないことを聞きながら進めることができました。

・**曾於市と都城をつなぐ上でも、すばらしい研修だった**と思います。今後も、ぜひ継続して行って、実態把握のカンファレンス力や様々なケースを知ることでお互いに協力できるネットワークを広げていきたいです。ありがとうございました。